

LASER SWORD

2

レーザーソード2

Nachimo Enatsu

江夏なちも



LASER SWORD 2

江夏 なちも

レーザー・ソード2

田町という飲み屋街は岡山でも有数の繁華街である。

その南の一角にあるホテルの玄関から、今日も一人の中年サラリーマンが愛車のママチャリに跨り、駅前へと足を運んでいた。

この男、伊藤邦彦というごくごく平凡な中年サラリーマンであった。

いや、今でも平凡なサラリーマンに違いはないのだが、昨年の丁度今頃、駅前の『サテスタ』という駅ビル内の繁華街で、チンピラやくざから家出少女を助けようとしたのをきつかけに、全国広域暴力団一万の組員を傘下に治めた万原組四代目総長、万原行正と壮絶な戦いを繰り広げ、生き残った男である。

歳は四十五歳、細い黒縁のめがねを掛け、昔はスポーツマンとして地域のいろんな大会で活躍はしたものの、あくまでも地域であり、全国区には程遠いものであった。

娘が三人おり、女房は四年前に病気で亡くしていた。

娘たちは上から二十五歳、二十一歳、十七歳で、その三人を早く片付け、自由奔放に暮らしたいと考えてはいるが、まだまだ先の話で、あと十年は頑張らなければと思っっている伊藤であった。

昨年、万原組との争いの中で知り合った黒木瞳似の泉川友子との交際は、お互いの家族ぐるみで付き合っていた。

二人で何度も修羅場をくぐり、危機一髪のところを助け、助けられた。お互いに尊敬し、愛し合う仲であった。

伊藤は駅前、西口と同じチェーンのホテルを巡回し、午後の七時には田町へ戻ってきた。伊藤は三つのホテルの責任者だった。

ホテルの玄関に入るとフロントの二十一歳になる千賀が、

「伊藤さん！お客様がお待ちになられています」と伊藤に向かって左手の喫煙コーナーを差し示した。

伊藤は手提げかばんを持ったまま喫煙室へ顔を向けた。

喫煙コーナーで待っていた男性が千賀の声で立ちあがり、玄関から入って来た伊藤に軽く会釈をした。

伊藤は、誰だろうと不安げな顔で喫煙室を見て、顔が一瞬の内て明るく変わった。

その男は四ヶ月前、マンゲンキャッスルでの四代目総長万原行正との戦いで、絶対絶命のピンチの時に救ってくれたSCA（スペシャル・シークレット・アーミー）の潜入捜査官の高橋だった。

二人はお互いに近づき両手で握手を交わした。

またあの時の記憶が鮮明に残っており、伊藤にとって命の恩人の一人だった。

「お久しぶりですね！お元氣でした？」と伊藤は満面に笑顔を浮かべた。

「あの時は伊藤さんのご活躍に心から感謝をしています。おかげで万原組が一掃できました」と同じように笑顔で応えた。

「ところで、今日は何の用事で来られたのですか？、まさか出張の途中で寄ったということはないでしょう！」と伊藤は握手した手を離しながら訊ねた。

高橋は笑顔からまじめな顔に戻って、深刻な話をこれからするといった様子で伊藤を喫煙コーナーのソファへ手招きをした。

「実は、四ヶ月前のマンゲンキャツスルの現場検証から武器、麻薬の密売ルートが、中国の東部に位置する北京から来たものと判明いたしました。それで我が隊長の小田島は、先月のルートの出所を探るべく単身で北京に赴きました。勿論、中国公安部公安機関の協力の下、毎日のように報告がS C Aの本部に届きました。

しかしこの一週間前に、重大な情報を掴みかけているとの報告があり、協力者の公安部陳氏と吉林省へ行くと言った後、連絡が途絶えました。

そして三日後に、陳氏が頭や体に大怪我をして戻ってきた時、小田島は中国マフィアに捕らえられたと連絡がありました。

そしてその二日後に、我々SCAの隊員十名が観光客を装い、北京へ向い、陳氏の案内が怪我のためまだ無理なので、地図と案内人を頼りに吉林省へ出発しました。

しかし、出発したとの連絡を最後にその十人も消息を絶ってしまいました」とそこまで説明した高橋は、握りこぶしを震える程強く握り、伊藤に向かって

「伊藤さん！隊長以下あの十人はSCAでも特に有能なメンバーをえりすぐりました。どんなに最悪でも全滅という事はありませんので。必ず何処かで身を隠し、我々の次の部隊が助けに来るのを信じて待つていると思います。または隊長と同じように中国マフィアに掴まっている可能性もあります。伊藤さん！警視庁のトップ毛利があなたのご活躍をご存知です。そしてあなたに是非、力を貸していただけるように頼んできてくれと私を使わされたのです」と必死の思いを高橋は語った。

「えっ！わ、私が手助けをするという事ですか？」と伊藤はびっくり仰天してしまった。伊藤にしてみれば、四ヶ月前に一万の組員を持つ万原組をつぶしたヒーローではあるが、なにしろ偶然と偶然が山積みされたうえでの結果だったわけで、今でもただの中年サラリーマンとしか思っていない伊藤だった。そこへ、警視庁のトップから助けて欲しいと言われても、何もできない、できる訳がないと思うのは当然であった。

「伊藤さん、私からもお願いします。あなたはたまたまだったとお考えかも知れませんが、

我々SCAの中でもあなたの能力の高さは群を抜いてる。あなた以外では小田島と十人を助け出すことは無理だと思えます。どうか、お願いします。私とあと三名が同行します。一刻の猶予もありません。是非、我々と一緒に中国へ行っていただけませんか！」と高橋は必死の形相で懇願したのだった。

伊藤は何事にも頼まれれば断れない性格だった。しかし、「いいですよ」と簡単に了解できる内容では無かった。もし失敗すれば、二度と日本の地を踏めないということだった。

しかし、伊藤は……。

「わかりました。一緒に行きます」と口走ってしまった。

SCAの隊長や、その精鋭十人がなし得なかったことを、中年サラリーマンの伊藤が中国に行つて何ができるといふのだろうか！

「あ、ありがとうございます。これで勇氣百倍です」と高橋はほっとしたような顔になった。

「ところで、いつ出発します？」と伊藤は尋ねた。

「明日の午後、成田を出発します」と、高橋はいとも簡単に答えた。

「えっ！あ、明日の午後？そ、そんなに早くですか！」と伊藤はあわてて聞き返した。

「はい、一分でも早く中国に行つて消息を探りたいんです。お願いします。会社やパスポートはこちらで手配します。じゃあ、明日の朝九時岡山発の新幹線のぞみで行きますからお願

いします」と高橋は席を立ち、足早に玄関を出て行った。

その後ろ姿を見送った伊藤は、ホテルのフロント横から事務所へ入った。

フロントから顔を覗かせた千賀が、

「さっきの人、あの時の運転手で送ってくれた隊員さんでしょ！何だったんですか？」と可愛い顔のおでこにしわを寄せて聞いてきた。

千賀もあの万原組との抗争でとばっちりを受け、拉致監禁された一人だった。

「明日から一週間程中国に行つて来る。警視庁からあの時の褒美として中国旅行の招待を受けた。会社も事情は知らない筈だけど了解したらしい。だから明日から可愛い千賀とは当分会えないよー」と伊藤は中年のいやらしい目つきでにやつとした。

「うっそー！わたしもあの時、協力したでしょ！わたしも連れてつて！」と口を尖らせてぐずぐず言うので、

「千賀はスッポンポンで柱に縛られてピーピー泣いとただじゃやないか！」

「スッポンポンは余計じゃー。わたしのナイスボディを見た感謝料がまだ七回も残ってる。どうしてくれるー」と千賀が食いついた。

伊藤は腕組みしながら目を瞑って、

「小学生にしては毛深かったなー」とポツリと呟くと「ビュー」っとうなりを上げてサイ